

赤根谷時代の遠藤ミマン先生、他 [1]

三村伸

(元宮小牧市美術博物館学芸員)

Ponarty 創刊号に「ミマン先生の夢」と題して拙文を掲載したが、少々紹介文的硬い内容で内心忸怩たるものが残った。発刊後まもなく遠藤ミマン先生の夢であった美術館が2013年7月に開館、9月には「遠藤ミマン生誕100年記念展 勇弘原野を愛して」を開催することができた。その暑かった夏、企画展準備のため、ミマン先生の3女である土田なぎささんを幾度も訪問した。土田さん宅には、遠藤先生の若き日の貴重な写真や日記、そして大量のスケッチ類が各室に何箱にも整理され保管されていた。まさにお宝に出会ったのであった。その宝の山からの報告を2、3記したい。

【大切に保存されていた記事】

遠藤満男(1913~2004)の《蝶と芒》(油彩、1941年)が国画会展に初入選したことはよく知られていたが、その快拳を語る新聞の切抜きが大切にスクラップされ保存されていた。黄ばんだ誌面には「国画会展に入選 苦小牧西小の遠藤先生」と大きな見出し活字が躍っている。昭和16(1941)年3月の記事である。遠藤満男の所感が載っている。「勇弘原野に生れここに育った私には、目をつぶつても、茫漠とした原野の姿が脈々として波うつてをります、一見頗る単調な変化の乏しい火山灰地帯ですが他地方では見られぬ独特な美しさを形成しています、それは無表情であります、



遠藤ミマン《蝶と芒》(油彩、1941年)

素朴で飾らぬ強固な美しさです。私は、永い間、この地の風景を頭の奥深くあたためて参りました、今度の出品も、日頃のスケッチをもとにして、北方的な色の濃さを自由に表現して見ました」。生涯勇弘原野を描き続けた遠藤ミマンの原点が明快に語られている。後年、遠藤ミマンはこの作品の創作意図についてこう記している。「《蝶と芒》は)物写しの絵、自然の一部を

切りとった絵から、組み立ての絵、構成を主とした絵へ」を模索した作品で「開弧線で描いた地平線。あれは宇宙的表現の意味だった」。60数年におよぶ遠藤ミマンの画業を振り返ってみても、この《蝶と芒》は抽象の世界に限りなく近づいた作品であったといえよう。またスクラップの余白には、師と仰いだ画家・国松登の作品評が遠藤先生自身の手書きで写されていて、どれほどそのコメントがミマン先生に嬉しかったが直かに伝わってくる。

【見つかったアトリエ写真】

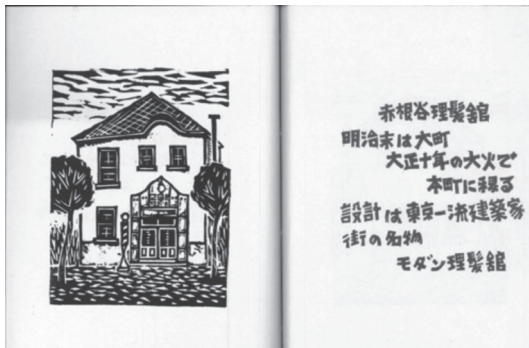
先ごろ、地元の老舗やきとり店「鳥元^{とりげん}」が3月末で閉店との新聞報道があった。約90年前の建物であり、元々は理髪館であった。そして小生には何よりも遠藤満男が戦前そこに下宿し、数々の秀作を生み出した場所として、歴史的文化的価値のある重要な建物なのであった。

遠藤満男は昭和8(1933)年苫小牧西尋常小学校に訓導として赴任、「赤根谷理髪館」の2階に下宿した。そのことは、前回取り上げた画家・能登正智(1922〜2001)や当時西小学校の同僚であった紺野義雄の証言がある。まずは能登正智の文から。



赤根谷理髪館2階の遠藤ミマン(1941年頃)

「苫小牧に来て、1番さきに出会ったのは、遠藤未満先生であった。そのころ先生は大通りの「アカネヤ理髪館」の2階に住んでいた。未満先生と知り合ったのはこの前年で、札幌の独立美術の夏期講習会であった。やつと絵らしいものを描くようになった私には、まぶしいくらいの先輩であった。このころ、大戦もいよ



能登正智《続苫小牧昔物語》(絵本、1985年)

いよ激しく、物資は欠乏、油絵の材料なども、絵の具一本を幾月かでやつと手に入れるほどであった。用具ばかりか、美術雑誌などもなく、画集などは、古本屋の主が隠し持っていたものを、ひそかに見せてくれた好意に、涙が出るほどうれしかったのを、いまでもおぼえている。(中略)アカネヤ理髪館の2階の未満先生の部屋には、4号くらいの上半身の人物画がずらりと並んでいた。それはみな、戦争に連れて行かれた、教え子の肖像であるという。私が戦いに駆り出されるま

での短い月日に、戦乱の中でどんな絵を描くべきか、という問題を考え続けていた」

『版画と私』(北海道新聞夕刊)1984年11月8日)。

能登さんが1985年に刊行した絵本《続苫小牧昔物語》に、その赤根谷理髪館が川上澄生を髣髴させるスタイルで載っている。また付けられた文章も味わい深い「赤根谷理髪館／明治末は大町／大正十年の大火で／本町に移

る／設計は東京一流建築家／街の名物／モダン理髪館」。まさに画文ともに川上澄生調であり、川上芸術への限りないオマージュである。

次に、紺野義雄氏の「苦小牧美術協会の第1回展の思い出」を。

「そのころの遠藤ミマン先生といっても、もう40年前のことだから、もちろん独身、大通りの赤根谷という床屋さんの2階の1室に、ガバガバの硬い布地のキャンバスを敷きつめて、画きかけた油絵を何枚も壁に立て掛けていた。階段を昇って行くとブーンと油の臭いがした。私は時々トレーニングシャツで夜の走りに出かけ、途中ここに立寄ることが多かった。同じ西小の若いきれいな女の先生が訪ねていたことがある。今の奥さん。「こんど苦小牧美術協会展を開くんだ。女学校の藤井先生も出品してくれるよ。あんたも出さないか」という。私は明治神宮の全国陸上選手権が終って解放された時だったから、さっそく赤根谷に通った。絵具も筆も使わしてもらって自画像を描いた。展覧会場は新川通りの役場近くの公会堂ではなかったか。藤井先生はやわらかいタッチの花を2、3点出されていた。あれからもう40年もつづいたのか(「苦小牧美術協会40周年記念誌」1979年7月15日)。

当時のザックバラんでうらやましくもある交友風景が活写されている。また遠藤先生の奥様(若林瑞枝)が一寸登場するのも素晴らしい。

この「赤根谷時代」を語る写真が数葉出てきたのだ。長年探していた写真であった。

特徴的な窓のある室内で青年がキャンバス―二人の少女が描かれている―とともに写っている。遠藤ミマンのトレードマークだった「白髪、白いあごひげ」がないので、一見すると遠藤先生とは思えないし、信じられない。しかし、先生の他の肖像写真と見比べれば、まちがいはなくこの青年は遠藤ミマンであることがわかる。28歳頃の遠藤先生である。

この「赤根谷理髪館」の建物は戦後改修を重ねながら、その特徴のある屋根の形、窓を残しながら、1970年頃から「焼き鳥の鳥元」として営業していた。評判の美味い店であった。長い年月を生き延びてきた、この遠藤ミマンゆかりの建物がなんとか残ってほしいと願うばかりだ。

(続)

PONARTY

赤根谷時代の遠藤ミマン先生、他 [1] 三村 伸

住 所／苫小牧市字樽前 114

ホームページ／tarumae.com

発 行 日／平成 27年3月

発 行 所／NPO 法人樽前arty プラス

発行責任者／藤沢 レオ

装 丁／堀米 和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。